
ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

伊藤ナノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

【Nコード】

N7959Y

【作者名】

伊藤ナノ

【あらすじ】

ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだったの後日談…、だったはずがなぜかまだ続いています…。

基本は1人称です。設定は自分でも謎です。練習作です、生暖かい目で見てください。

3章が終了しました。4章から宇宙編になります。

4章の投稿ペースは落ちることになりそうです…。

宇宙編は今までと設定が違いすぎるので書きづらいのです。

※ いきなり最初からチートです。チート主人公が苦手な場合はご注意ください。

後日談

俺たちは、日本の復興するのに金が必要だった。東亜連邦共和国の一部として、復興資金を求めた。それなりの金額はでた。

軍隊も500の武装獣がいる。あの戦いで数が減ったのを補充してもらったのだ。

軍隊の維持には金がかかるのでこれくらいが今の財政状況では一杯だ。

50機を1部隊として、10部隊を治安維持に回している。はつきり言って足りないのだがしょうがない。

武装獣がない地域での機人の来襲には、俺がサンダーボルトとギガバレットの乱れ撃ちで対応しているのが現状だ。

機人はどうやら太平洋諸島から来ているようだ。

機人がいないと魔石が取れない。東亜連邦は魔石を取るために戦闘艦を複数用意して太平洋諸島で戦っているようだが、俺にはお呼びがかからない。俺が行くと機人を殲滅してしまうからだ。東亜連邦の目的は魔石の定期的な確保であって殲滅ではない。

日本では、四国だけ機人を残して置いた。そこから飛来する機人から魔石を取るのだ。なので俺の部隊は四国周辺の地域に主に展開している。

後は地道にインフラ整備をする必要があった。魔導機関を作成する工場を東亜連邦の協力で建築をしていった。これがないとこの世界では動力源がない。発電も魔導機関で行なっているのだ。

四国周辺からインフラ整備を始めた。なぜなら武装獣の部隊を配備している治安を維持できるところがこの地域だけだからだ。

具体的には九州、中国、近畿地方が対象になる。投資する資金が限られているのだ。ここから俺とアヴェルアーカは復興の仕事を始めた。

発電所を造り道路を造り、廃墟になっていた街を作り替えていく。気の長い仕事だ。

仕事をしていくうちに俺は200才になっていた。約10年で日本にも人が住むようになっていた。冒険者には機人が必要だ。冒険者も集まってきていた。ギルドも作られている。冒険者が入ればそれを当てにする商売をする人間もやってくる。

東亜連邦では主にインドネシアから魔石を取っているがそこは軍の戦闘地域だ。ユーラシア大陸から隔てられた諸島では冒険者が行くには難しいようなのだ。

人が増えてくれば食料の確保も必要だ。農業、漁業にも投資を行った。瀬戸内海は危険地域だが日本海なら安全だ。

これは気長に投資をしていくしかない。いつまでも東亜連邦に頼ってはられないのだ。

更に10年が経った。経済は順調に立ち上がっているようだ。俺は西日本での利益を東日本に当てられるようになっていた。東日本の担当はアヴェルアーカだ。アヴェルアーカも40才になっていたがまだ元気だ。だが、ロードはエルフほど長生きはできない。魔力が高いほど長生きするようだが、それでも200才が限界だろう。

更に20年が経った。東日本の復興も順調だ。発電所も建設した。道路や街の復興も行なっていた。東京は最優先に復興した。名古屋も順調だ。元々あった病院、学校などの福祉的な施設も次々と増やした。魔導機関による列車も次々と開通中だ。もう東亜連邦の支援はいらなくなった。問題は俺とアヴェルアーカとの間には子供はできないということが分かったことだ。俺は人造人間ではない。どちらかと言えば人間に近いのだ。人造人間と人間の間には子供は生まれない。少し寂しいがこればかりはどうしようもない。俺たちの子供はこの日本だ。そうアヴェルアーカに言った…。

更に30年が経った。北海道を除けばほぼ復興は終わった。北海道は観光地と漁業、農業、畜産、林業として育ててはいるがなかなか人が集まらないのだ。やはり寒いのは嫌なのだろうか。それに比べて沖縄は順調にいつている。南国は確かに魅力的だ。

それでも沖縄は赤字だ。昔の日本でも沖縄は国の補助金で賄われていたのが大きかった。北海道と沖縄はお荷物なのだ。

俺とアヴェルアーカは北海道について話しあった。

「どうするのよ？これ以上は人は集まりそうにないわよ」

「仕方がない、北海道に限って農業と畜産の法人化を認める。人さえ集まればいいのだ。それで商業もうまくいく」

「分かったわ、それしかないようね」

これで北海道は企業による参入で回復した。

とうとう、その時がきてしまった…。アヴェルアーカが倒れたのだ。もうアヴェルアーカも180才だ。引退してもらっていたが、それ

でも老化ばかりは止められない…。若返りの魔法などないのだ…。

「アヴェルアーカ聞こえるか？」

「聞こえるわよ、セージ」

「俺たちの子供、日本は成長した。お前は十分な仕事をしたんだ、ゆっくりしてていいんだぞ」

「そうね…、ゆっくりさせてもらうわ…、今まで楽しかったわ、セージ」

「まだ一緒にいよう！な？アヴェルアーカ」

「私はもう駄目みたいなの…」

「俺が回復してやる、死なせない！」

全体回復を発動した！だが、探知で俺は分かっていた。アヴェルアーカへの探知が弱っている。もうじき死ぬと…。

「俺もアヴェルアーカといて楽しかった！アヴェルアーカがいたからこの世界で生きていこうと思ったんだ」

「あ…りが…と…う…」

アヴェルアーカは息を引き取ったのだ…。

「アヴェルアーカ…！！！」

俺は泣いた。涙が止まらなかった。

それからの俺は魂が抜けたようだった。仕事をする気にもならなかった。もう俺がやらなくても日本の運営は回るようになっていく。

俺はなんのためにここにいいのか分からなくなったのだ。

自然と足がモスコヴィアに向かっていた。そう魔導研究所だ。

「英雄がこちらへなんの御用でしょうか？」

こここの所長のヴァスカーヴィルというらしい。

「以前、俺はここで召喚魔術の方法を伝えた、それについて情報共有したい」

「分かりました。付いてきて下さい」

俺は魔導研究所の召喚魔術の研究所に足を踏み入れた。

そこにはあの魔方陣が完成していたのだ。ここには6人いた。

一々、聞いて教わる必要などない。俺はそこにいる全員の意識を順々に奪って次々と知識を奪っていた。

どうやら、召喚魔術は完成に近づいているらしい。発動のキーがあ

と一歩足らないのだ。

俺はそれがなにか分かっていた。前の世界の魔導院の資料室で俺が知った知識の一つを埋め込めばいいのだ。

そして、今どこかで召喚術が発動する気配を観測していることも奪った知識で分かった。

どこかの異世界からこの世界の人間を召喚しようとしているのだ。

俺は魔方阵の中に立って、詠唱を開始した。その召喚とこの魔方阵を繋ぐのだ。

魔法は発動した。俺は光に包まれそしてこの世界から消えた。

後日談（後書き）

これが後日談です。4章ルートが開いていますが、無理っぽいです...。

第1話 スレイプニル

俺は地球に戻っていた。元の魔導研究所の魔方陣に召喚されたのだ。話せば長くなるが俺は召喚魔法で異世界に行っていた。

その世界で倒せば不老不死になるという巨大な龍と戦っていたのだ。ギガデストロイを86発撃ったところで戦いは終わった。不老不死になれる龍だけあって回復力が並じゃなかった。龍の攻撃も並じゃなかったが、それを凌いで倒したところで俺は不老不死になった。そこでここに召喚された。今までにない熱い戦いだったのだ。まあいい。

モスコヴィアは俺を呼びだそうとしたに違いないなぜだ？

「伝説の英雄を召喚できた！伝承通りの黒いエルフだ！」

なにやら喜び合っている。抱き合っている奴もいる。

「俺になんの用だ？」

「伝説の英雄にこの世界を救って欲しいのです！」

機人はあらかた片付けたはずだが、盛り返してきたのか？

「どこの地域で機人と戦っているんだ？」

「火星と木星の間にあるアステロイドベルトで機人と遭遇したのです！」

「はあ？、意味が分からん！」

どうやら、ここは俺が機人と戦った世界よりさらに500年進んだ世界らしい。

つまり俺が生まれた世界より1000年後だ。

人類は火星をテラフォーミングしている最中で、そこにドーム造り、生活をしているものも出てきているらしい。

魔石を人工的に生み出せるようになって地球から機人は掃討されたようだ。

人類はそこで宇宙に踏み出しのだ。月面にドームを作って生活を始め、火星の改良を行った。

そこからアステロイドベルトの小惑星ケレスを足場に木星へと手を伸ばしたところで機人と再び遭遇したらしい。

モスコヴィアは俺が知っているよりさらに高いビル群が並んでいた。その間をチューブが通っておりそれが列車のようなものらしい。某レンズを腕に嵌めた某銀河パトロール達が戦った未来のよ
うな光景だ。

燃料を宇宙から確保できたので急速に発展したらしい。

とりあえず、聞いてみた。

「宇宙で機人と何に乗って戦っているんだ？」

「バトルシップです」

うん、全く想像が付かない。

俺は実物を見るために、地球の宇宙ステーションへと昇ることになった。これは地表から宇宙までの伸びる広大なエレベータみたいなものだった。軌道エレベータというらしい。宇宙からの物資の搬入も行うためにこのような大きさになったということらしい。

その宇宙ステーションで最新鋭のバトルシップを見た。

4機の重水素による核融合ジェネレータを搭載し、艦首に主砲、両サイドに4門づつの長距離砲を積んだ化け物だ。

さらに魔導機関も備えているらしい。このバトルシップはスレイプニルと呼ばれている。

大きさは500mにもなり、ジェネレータにより攻撃はレーザーを撃つ。防御にはジェネレータによるエネルギーシールドを4つまで展開する。移動にはジェネレータによる推進力と魔導機関によるワイプを持っているそうだ。

魔導機関をメイン動力にしないのはジャマーを無効にするために開発された機体だからだ。それに魔導機関ではエネルギーが足りないということもある。

俺のレベルは異世界で420まで達したがそんな問題じゃない。攻撃魔法撃つより強力なんじゃね？、これ。

俺は上級魔法を1100発、最上級魔法を550発、超上級魔法を225発は撃てるがそんなもんじゃねー。

第1話 スレイプニル（後書き）

4章がはじまりましたが、宇宙編です…。自分もびっくりでした…。

第2話 アステロイドベルト

「相手の機人はどのくらいの大きさなんだ？」

これで戦う機人ってヤバすぎるだろう。

「エクシアで1キロ、デュナメスで2・5キロ、ドミニオンで5キロといった大きさです」

5キロの敵ってなんだよ。エナジーサークル真っ白どころじゃない。それを超えてるだろ。

「機人の攻撃はなんなんだ？」

「レーザーをがんがん撃ってきます」

いや、5キロの敵のレーザーって某波動砲じゃねーのか？本当にこのシールドで耐えられるのか？

俺の持つ最大級防御魔法インビンシブルでも耐えられないんじゃないのか？

バレットでは全く効かないだろうというか射程が足りない。俺の開発した実弾系超上級攻撃魔法スーパーマーピアッシング（超徹甲弾）かスーパバレット（超貫通弾）でも効くかどうかは分からない…。

「ではさっそく乗って貰います、これで最前線基地ケレスまで行って貰います」

いや、俺ってさ、宇宙戦闘機って乗ったことないのよ。まじで無理だって。

「乗り方教えてくれないと行けねーよ」

「メインスクリーンは戦闘用です。サブスクリーンがワープ用です。魔導機関により操縦は魔力で動きます。基本は武装獣でしたか、あなたの乗っていた機体と似ています」

簡単な説明ありがとうございました。わからねーっつーの。
俺はスレイプニルに乗せられた。

トリガーのハンドルは3つある。2つは主砲と副砲とシールド。右のトリガーの上のボタンを主砲になるらしい。シールドは左のトリガーの上に4つボタンがある。ワープは真ん中のトリガーのボタンらしい。

「ワープする時にはサブモニターで移動先を探して真ん中のトリガーを引いてください。」

そして、俺は魔力を出して発進した。大丈夫なのか、俺…。

サブモニターを見る。くるくる座標が変わる。そして火星の次に小惑星が写った。これが目的地のケレスだろう。

俺はワープボタンを押した。一気に体が持って行かれる！体にGがかかったようだ。どのくらいこのまま続くんだ？

数十秒だろうか。俺は最前線の小惑星ケレス付近の宇宙空間にいる。

やはり、宇宙は広いなあと素朴な感慨に浸っていた時だ。

なんか来た、1キロはある機人だ。これがエクシアってやつだろう。

俺はいきなり戦闘を開始することになった。

いきなりレーザーを撃ってきた。俺はシールドのボタンを押した！これで防げるのか？

どうやら耐えているようだ。スーパーバレットを機人のエナジーサイクルへと連射する。

3発で沈んだ…。弱いじゃねーか、びびらせんなよ。

なんか俺の周りにエクシアが集まってきた。ちょっと待て！いきなりでそれはないだろう。

6機もいる。俺はシールドを4つ展開しながらスーパーバレットを撃ちこんで全機沈めた。

とりあえず、ケレスとやらに行かなくては戦いが続いてしまう。俺はバトルシップを飛ばした。

ケレス付近で交信がきた。

「こちらは小惑星基地ケレス、そちらの所属を教えてください」

「俺はセージ、伝説の英雄だ」

「お待ちしております。着陸を許可します」

「どこに降りるんだ？」

「信号を発光していますのでそれに続いて進んで下さい」

たしかに光の点が両側に続いている。この真中を進めってことか

俺はケレスに着陸した。

「私がこの司令官のヴァルガルだ、君が伝説の英雄か、待っていたよ。君の活躍に期待している」

「活躍たって、ここは宇宙だ、勝手が違う。まず状況を教えてくれ」

「機人はアステロイドベルトの軌道上にいる。それを排除する必要があるのだ」

「アステロイドベルトと言ったって広いだろ」

「機人との前線は8つある。まずこの小惑星ケレスの防衛、それとフローラ、テミス、エオス、ニサ、エウノミア、コロニス、ベスタだ」

「ここでは俺の超上級攻撃魔法ギガンダーボルトが効かないんだぞ。雲がないからな」

ギガンダーボルトは高速で雲を集め雷の雨を降らせる魔法だ。地道に叩くしかないようだ。それに俺の探知は3・2キロで宇宙ではまったく使えない。

「君には実弾系攻撃魔法があるそうじゃないか、それで機人を倒してくれればいい」

超上級の実弾系攻撃魔法は2つしかないんだよ！スーパーアーマーピアッシング（超徹甲弾）かスーパーバレット（超貫通弾）だ。

「分かった、俺はどこで戦えばいいんだ？」

「フローラでまず戦って貰う、アステロイドベルトの戦線の一つだ。まずその機人を片付けてくれ」

「とりあえず戦ってみるわ」

俺はフローラで戦っていた。まだドミニオンは見えていない。やつはどこにいるんだ？スーパーバレットを撃ちながら戦っていた。真面目な話、シールド展開中は主砲も副砲も撃てないのだ。効率的に反撃するには実弾系魔法しかない。

だいたい機人はどこからやってきてるんだ？いくら倒しても数が減った気がしない。ちなみに俺のレベルもあがらない。

第3話 機人の正体

俺は小惑星ケレスに戻っていた。

「君の活躍は聞いた。さすが伝説の英雄だと噂になっているようだな」

ヴァルガルが待っていた。

「機人をいくら倒しても湧いてくるんだよ、これじゃキリがねーよ」

「そうなのだ、過去の記録では機人はマザーシップというもので新しく現れたと聞いているが、ここではいくら倒しても機人が減らないのだ」

なんという無限ループな戦闘だよ。これは聞いていない。

「どこから現れるとか分からないのか？」

「それが掴めないからこちらも苦労しているんだ」

不毛な議論だった。

「とりあえず、戦闘を続けてくれ。戦線を維持するしかないのだ」

「わかったよ、戦えばいいんだろう」

まあ、武装獣のキャノン砲と違ってレーザーは無限に撃てるのが救いだ。あまり使っていないけど…。

「次はどこで戦えばいいんだ？」

「バトルシップはエウノミアを抑えるので一杯で他の戦線が手薄になっっているんだ、そこをフォローしてくれ」

どうやら、エウノミアは相当激戦地域のようなのだ。

結局、俺はまたフローラの戦線に戻っていった。

やはり、きりがないのだ。機人をいくら倒してもすぐまた現れる。どうなってるんだ？

地球ではこんなことはなかったのだ。

この謎が解けない限り、戦闘は終わらないだろう。

そこで戦いを始めてから3週間目でドミニオンを見つけた。戦いながらドミニオンに接近した時に違和感を感じたのだ。

機械の意識じゃない？俺は意識を奪った。そして知ったのだ、機人の正体を…。

第3話 機人の正体（後書き）

変なところで展開が変わったので今回は短いです…

第4話 トロヤ群

機人は、宇宙人だった。本拠地は木星の軌道上の小惑星の集まりトロヤ群と呼ばれる中に存在する。地球に1000年前から侵略を開始した。そうあのスコープオンを始めとした機人だ。それを駆逐されたためトロヤ群から乗り出したのだ。

そこでアステロイドベルトでの戦闘になったということらしい。

宇宙人はアルファ・ケンタウリ恒星系からやってきた。故郷の惑星がすでに住めなくなっていたのだ。魔力の強い惑星だったがやがてそれが濃くなっていったのだ。魔力はやがて魔障となり、魔障に侵された宇宙人は魔物になってしまった。それで惑星を捨てたらしい。近くの居住可能な惑星を探した。それが地球だ。その侵略のためにトロヤ群にコロニーという擬似惑星を造り住んでいるらしい。

俺は捕まえたドミニオンから宇宙人を引っ張り出しケレスにワープした。

「俺はセージだ。宇宙人のパイロットを捕獲した」

「本当なの？ 着陸を許可する」

俺のスレイプニルはケレスに着陸した。

「宇宙人を捕獲したと聞いたが、本当なのか？」

ヴァルガルが待っていた。

「こいつが宇宙人だ」

「機人に宇宙人がいるというのは始めて聞いたが、実物が目の前にいるのでは信用するしかないな」

「まず、機人はいくら倒しても減らない、生産拠があるんだ」

「それも新しい情報だ！、その拠はどこにあるんだ！？」

「エウノミアだ、そこにある」

「だが、そこは最も防御が厚い戦線だ、制圧するには戦力が足りない。他の戦線も維持しなければならぬのだ。戦線を突破されれば火星が危ない。火星は既に人類の居住地となっているんだよ」

「どのくらいで戦力が揃うんだ？」

「半年は待ってくれ、兵とバトルシップを準備する必要がある」

「それと宇宙人の本拠地が分かった」

「それはどこにあるんだ！？」

「木星の衛星軌道上にあるトロヤ群の中だ、そこに宇宙人が造った人工惑星がある」

「だが、まだそこまでは行けない。先にアステロイドベルトを全て制圧する必要がある。攻勢に出るにはそれが必要なんだ。まずはエウノミアの制圧だ。次に8つの拠から全ての機人を排除しなければならぬ。アステロイドベルトの安全の確保が先だ」

「分かった、まずは戦力を揃えるところからだな」

バトルシップのワープを発動させるにはある一定以上の魔力が必要だ。それを満たすものを掻き集めるのだ。幸い、機人との長い戦いで人類の魔力は高まっていた。それ程難しい話ではない。

「君にはエウノミアに行ってもらおう。戦力が揃うまでそこを抑えていてくれ」

俺は激戦地帯のエウノミアで戦うことになった。ここの戦線を半年間維持する必要があるのだ。

俺の戦いは始まった。この巨大な戦闘機は補給を気にする必要は当分ない。重水素の燃料は4年は持つのだ。

空気は魔導機関によって生成される。食料はエアチューブから補給する。味気ない液体食料だ。

俺はシールドを展開しながらスーパーバレットを撃ちこみ続ける。

敵を次々と沈めていく。俺は3機のドミニオンの意識を奪ってそれを盾にしながらい戦いを続ける。盾を失うと次のドミニオンを捕まえる。ドミニオンの火力でエクシア、デュナメスを沈めていく。ドミニオン相手でも4対1だ。そうそう負けることはない。

ひたすら戦い続けた。さすがに睡眠を取るときだけケレスに戻る。

激戦地帯のエウノミアで睡眠を取れる場所はないのだ。空域全部が戦線だからだ。

そんな戦いを半年続け、やっとバトルシップが集まった。スレイプニルの他にも重武装バトルシップもいる。主砲を2門と長距離砲を16門を積んだレーヴァテインだ。大きさは500mと変わらないが幅が400m近くある。砲門のハリネズミのようなバトルシップだ。シールドも展開可能だ。武装獣で言えばヴァラーハみたいなもの

んだらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959y/>

ゴブリンシャーマンに召喚されたらダークエルフだった…、その後。

2011年11月26日18時55分発行